

立命館大学図書館蔵『詠百首和歌』について

川崎 佐知子

立命館大学図書館に新収された曼殊院宮良恕親王筆『詠百首和歌』一軸（請求記号〈911.15R.96〉、資料番号〈11003488640〉）について論述する。

同本は、二重箱入。外箱は改装黒塗台箱である。内箱は桐製で、蓋表に「百首詠歌 曼殊院宮法親王良恕筆」と墨書。蓋裏には、方形陰刻朱印（印記「本願寺印」）を捺印する。

卷子本一軸。寸法、縦二三・〇糎、横七一・九・二糎。浅黄色地唐草等文様金欄表紙。金空押題簽に外題「良恕法親王百首歌」と墨書。銀紗綾形地文様紙金銀切箔砂子等撒見返。後述のとおり、表装は大正二年（一九一三）四月に改められ、現在に至ると推測する。

本文料紙は斐紙。内題「詠百首和歌」とあり、下に「沙門良恕」と記す。本文は、「閑路早春」以下の藤川百首題（ただし、「古渡秋霧」は「古渡夕霧」、「社頭祝言」は「社頭祝君」）による百首。一首は二行書きである。本文を見せ消ちし、右傍に書き入れた箇所がある。また、題の下に、鉤点をかけ、二行の小書き

で和歌を書く場合もある。これらの書き入れも含め、本文は一筆書きかと思われる。

巻軸に、つぎの記述がある。

此百首者従上巳始而六月十四日遂其功
畢然者依好便此一巻令清書中院入道
合點之儀所望之処及再吟後悔之事數多
在之間式部卿。江先御談合申御不審之所々
令改作重而中院入道遣之候也
慶長十四年八月廿六日

この百首は、三月三日より始め、六月十四日に詠み遂げた。一巻に清書し、中院入道に合点を所望したところ、再吟となった。式部卿宮へ談合申し、御不審の箇所を改作し、再び中院入道へ遣わした。以上は百首の成立事情であり、最後に慶長十四年（一六〇九）八月二十六日の日付を記す。

右の奥書を信ずれば、この一軸は、良恕親王（一五七四—一六四三）が、中院通勝（也足軒素然、一五六一—一六一〇）に批点を乞うた百首を再吟し、八条宮智仁親王（一五七九—一六二九）に相談のうえ、中院通勝に差し出したものである。

作者の良恕親王は、曼殊院第二十八世門跡。天台座主。諡号、龍華院宮。陽光太上天皇（誠仁親王）第三皇子。母は新上東門院勸修寺晴子。まとまった家集は存しないが、慶長十年九月十六日に催された『慶長千首』に三十六首入集するなど、宮中歌会で活躍した。年譜は、新井栄藏氏〔桜町上皇勅封 曼殊院藏〕古今伝授 一箱—曼殊院本古今伝授関係資料七十三種をめぐって—〔国語国文〕第四五巻第七号・五〇三号 一九七六年七月、越智美登子氏〔解説〕（京都大学国語国文資料叢書十一）叢塵集 曼殊院藏 臨川書店 一九七八年、同氏〔解説〕（京都大学国語国文資料叢書四十五・四十六）『良恕問書 曼殊院藏』上下 臨川書店 一九八四年、『正親町天皇実録』第二巻（天皇皇族実録100 ゆまに書房 二〇〇五年）所収「皇孫良恕親王」項に詳しい。越智美登子氏〔良恕問書の世界〕（『国語国文』第四七巻第一号・五二—一五二）一九七八年一月）は、良恕親王筆問書七冊（前掲の京都大学国語国文資料叢書十一および四十五・四十六に影印・翻刻掲載）を論じ、歌壇的活動にも言及する。

智仁親王は良恕親王の同腹弟。『図書寮叢刊 智仁親王詠草類』一・二・三（宮内庁書陵部 一九九九年・二〇〇〇年・二〇〇一年）所載の詠草により、良恕親王の聖廟御法案、中院通勝の月次

歌会に参会したことなどが窺い知れる。慶長五年、細川幽斎より古今伝授を受けた。慶長五年より同十四年にかけて、中院通勝の添削を受けた（『図書寮叢刊 智仁親王詠草類』三所収「解題」に拠る）。

中院通勝については、日下幸男氏『中院通勝の研究—年譜稿篇・歌集歌論篇』（勉誠出版 二〇一三年）に良恕親王との関係を論じる。また、良恕親王の和歌門弟、山本正重による『正重問書』を翻刻掲載する。

立命館大学図書館蔵『詠百首和歌』に附属する文書類に触れておく。伝来に関わるものに、恒川了廬〔一七七五—一八六〇〕の極札がある。札表に「曼殊院良恕入道親王」と記し、方形陰刻朱印（印記「辨物正言」、および瓢形単郭陽刻朱印（印記「了廬」）を捺す。札裏の上部に「癸丑五」（寛政五年（一七九三））と墨書し、方形単郭陽刻朱印（印記「温故知新」）の割印を捺す。同中央部に「慶長十四年八月廿六」と墨書し、方形単郭陽刻朱印（印記「経」）を捺す。

古い巻緒が残り、その包紙に「曼殊院宮良恕親王巻紐／大正二年癸丑四月買求の新調取換ナリ」と記す。買求の大正二年四月以前には、西本願寺に蔵された。『大谷家（本派本願寺）旧御蔵品入札 第壹回』（大正二年（一九一三）三月二十七日・二十八日・二十九日・三十日下見、四月一日入札当日。場所、本派本願寺御殿）の三二頁に、一〇七七「良恕親王百首詠歌巻」として掲載される。内箱の調製はその時分であろう。また、現状の改装は

買求者に拠るかと考えられる。

『和歌大辞典』（明治書院 一九八六年）の「良恕法親王詠草」項（井上宗雄氏執筆）に、「慶長一四 一六〇九年八月の百首歌（大阪市立大学図書館森文庫蔵の『類聚点取和歌』所収ほか）自筆本も存する由」と記す。そのうち、井上宗雄氏「中世歌壇史の研究 室町後期」（改訂新版 明治書院 一九八七年）において、「昭四六・五松坂屋古書逸品大即売展目録」に「慶長十四年八月廿六日」付けの奥書のある「良恕法親王歌卷」一軸の巻末の写真版が掲出されるとの指摘がある。『松坂屋古書逸品大即売展目録』（会期 一九七一年五月十一日―五月十六日 会場 松坂屋上野展本館六階催事場）六十四頁掲載の二二四「良恕法親王歌卷詠百首和歌（四季恋雑）慶長十四年奥書 卷子仕立」を確認した。同書の写真版は、題「山人人稀」歌より巻軸の題「社頭祝君」歌までの十首、および奥書である。立命館大学図書館蔵『詠百首和歌』（91―100番歌）と比較したところ、掲載部分の本文は、用字、字配り、見せ消ち、右傍への書き入れも含め、完全に一致する。同じ本である可能性が高いように思われる。

末筆ながら、原本の閲覧、翻刻の公開を許可して下さいました立命館大学図書館に、篤く御礼申しあげます。

本研究は、JSPS KAKENHI Grant Number JP20K00354 の助成を受けたものです。

注

(1) 恒川了廬については、松本文子氏「おどけの玉晷―恒川了廬をよく知る男―」（『国文鶴見』第四十三号 二〇〇九年三月）、同氏「先んじての扶持―了廬が支えた大舞台―」（『国文鶴見』第四十四号 二〇一〇年三月）、同氏「退かれぬ事情―了廬が負った二〇〇両―」（『国文鶴見』第四十五号 二〇一一年三月）、同氏「恒川了廬の用印―あわせて名の表記について―」（『国文鶴見』第四十六号 二〇一二年三月）、同氏「木下右衛門大夫の「右衛門切」か―了廬係、恒川経二郎の模写を手がかりに―」（『国文鶴見』第五十一号 二〇一七年三月）、および、松本文子氏「略年譜」古筆目利 恒川了廬（一）―尾張徳川家「御小納戸日記」より―」（『鶴見日本文学』第十四号 二〇一〇年三月）、同氏「略年譜」古筆目利 恒川了廬（二）―尾張徳川家「御小納戸日記」より―」（『鶴見日本文学』第十五号 二〇一一年三月）、同氏「略年譜」古筆目利 恒川了廬（三）―尾張徳川家「御小納戸日記」より―」（『鶴見日本文学』第十七号 二〇一三年三月）、同氏「略年譜」古筆目利 恒川了廬（一）―末尾再掲―尾張徳川家「御小納戸日記」より―」（『鶴見日本文学』第十八号 二〇一四年三月）、同氏「略年譜」古筆目利 恒川了廬（二）―弘化二年分再掲―尾張徳川家「御小納戸日記」より―」（『鶴見日本文学』第二十号 二〇一六年三月）を参照した。

〔凡例〕

立命館大学図書館蔵『詠百首和歌』（請求記号〈911.15/R 96〉、資料番号〈1100348640〉）を全文翻刻する。翻刻に際しては、原本に忠実であるよう努めたが、つぎに記す方針により、あらためた箇所がある。

- 一、字高、改行などの本文の様式は、原則として原本のとおりとした。
- 二、本文の仮名遣い、清濁、おどり字などの表記は、原則として原本を做った。
- 三、漢字は、原則として通行字体に改めた。
- 四、原本にある見せ消ちは、取消線（―）で示した。
- 五、便宜上、和歌に通し番号を付し、各初句の前に算用数字で示した。

〔翻刻〕

詠百首和歌

沙門良恕

関路早春

1 ささぬへき花の名こそその関とてや

戸さ、ぬ山に春は来ぬらし

湖上朝霞

（朝ほらけ霞にかよふにはの海の舟にのどけき波の春かせ

2 朝ほらけ志賀のから崎ふもとは

かすめる浪のいつこなるらむ

霞隔遠樹

3 まきもくのひはらのと山くもりしは

中く、かすむたえまなりけり

鞆中間鶯

4 なれも又おなし旅ねやいそくらむ

あさたつ野へのうくひすの声

隣家竹鶯

5 中垣の竹のさ枝の一かたに

やとらすぎなけ春のうくひす

田辺若菜

6 花かたみめならふ方にさそはれて

門田の面のわか菜をそつむ

野外残雪

7 春草はまた萌やらのこる野や

こそこの枯生のはつ雪の色

山路梅花

8 梅かほる山路の木陰たつねすは

人のこ、ろや花もうらみむ

梅薫夜風

（人めよく匂ひなるらし春の夜の枕とひくる梅のした風

9 春の夜の夢はかひなくいく度か

にはひにさむる梅のした風

水辺古柳

10 こほりとく水のみとりに川きしの
くち木の柳春やしるらむ

雨申待花

11 なかめつ、木のめも春の雨の日に
つれなきはなの色そまたる、

野花留人

12 こ、ろのみとまる野守か庵にきて
あやしやくらす花のした陰

遠望山花

13 帰るへきゆふへもしらぬ色ならし
こり入寄みねのはなのしら雲

曉庭落花

14 ねさめする枕にきけはちる比の
花にあやなき庭のまつ風

故郷夕花

15 さひしさの秋いかならんふる郷の
はなにまされぬゆふへ思へは

河上春月

16 たくひやは影もかすみにもり江の
はつせの川の波のうへの月

深夜帰雁

17 横雲もまたあけやらぬ山嶺越て
わかる、空のかりの一こゑ

藤花隨風

18 ふくからに松かせにほふ水の面の
木すゑ色わく池の藤なみ

橋辺款冬

19 大井川はしゆく人は山はふきの
花や咲ぬととへとこたへぬ

舟中暮春

20 くれてしも春の行ゑやゆらのとを
わたる舟路の波にたくへん

卯花隠路

21 たれ住てうの花かきの葎生も
はらはぬま、の雪のしたみち

初聞郭公

22 里わくと何かうらみむほと、きす
きく人からの初音なりせは

山家郭公

23 こ、ろあらはわかすむ山のと、きす
うき世の外の事かたらなむ

池朝菖蒲

24 うき草もあやめもわけて刈わたす
池のこ、ろは今朝そみえぬる

閑居蚊遣

25 暮ぬれば軒はにすたくかやり火の

けふりすくなき宿のさひしさ

廬橘驚夢 「手まぐらの匂ひにしたふたち花の
身はいにしへの夢をたどりて

26 夢かよ身のいにしへをたち花の

かほるまくらにおもひ出ては

杜五月雨

27 神なひのもりは時雨の色ならて

みとりにぬる、五月雨の比

野夕夏草

28 秋にさく花よりも先わけてみむ

なつ野の草の露のゆふへを

潤底螢火

29 おもひにはしつむならひと谷水の

底にみだれてはたわなふ「ほたるのかけそみたる、
やとりたになき道やいそかん

行路夕立 「ふりきつる野へとみつ、も夕たちの

30 松一木やとる野中にをくれきて

雨はあしとくすくる夕たち

初秋朝風

31 涼しさもありしよりけに今朝しもそ

袖におほゆる秋のはつ風

閏月七夕

32 逢みての後のふつきの七夕や

人たのめなるちまきりかけむ「名にしたつらん

野亭夕萩

33 夕かけの露けさそへて草の戸に

こはき花さく野への色かな

江辺眺萩

34 うしほみつ江の水さむみあか月は

萩の葉しほりうら風そふく

山家初雁

35 よきてなく声としもなし山さとの

秋のなみたをそふるかりかね

海上待月

36 碇おろしとまる夜舟はうら波に

月まつほと風なこむなり

松間夜月

37 散うせぬ松の葉つたひゆく月に

ふかせてしかな木からの声「もる

深山見月

38 山ふかき苔のしつくをきく夜半の

秋のあはれは月もしりてよ

草露映月

39 くる、野の草はみならずむ月の

ひかりを露の色とこそみれ

関路惜月

40 よしさらはうちもねな、む更る夜の

月をと、めぬすまの関もり

鹿声夜友

41 おとろかす夢より後の秋の夜は

鹿の音ならぬ友たにもなし

田家擣衣

42 露霜のをくつての小田のいほりにも

すむとしられてころもうつつ声

古渡夕霧

43 遠からていつかはやすのわたりせむ

ゆふ霧まよふ末のしら波

秋風満野

44 ふく音のいたりいたらぬ野くそなき

いつくをみあも風の小薄

籬下聞虫 へをのつから虫もなくなりわかやとの
草のまかきは露ふかくして

45 秋の色なくさめ草のまかきより

かれん物ともしらぬ虫の音

紅葉写水

46 川水にうつろふかけそさはくなる

なみをあらしの瀬々の紅葉は

山中紅葉

47 声たにも聞えぬ山にとふ鳥の

はねすのみち時雨てそ行

露底槿花

48 消のこる露さへあるにあさかほの

竹の葉かくれ何しほるらん

河辺菊花

49 こほれての匂ひもふかし水無瀬川

いつの世よりの菊のした露

独惜暮秋

50 身のたくひあらぬおもひの秋さへも

くるれば忍ふならひとをしれ

初冬時雨

51 天津風ふきとちやられてしくる、は

雲のかよひ路冬やきぬらむ

霜埋落葉

52 くれなるの色ぞめ返し木々はみな

おち葉かうへの霜そふかゝる

屋上聞霰

53 風さそふ音はあられのたまさかに

夢もむすはぬ真木の屋の内

古寺初雪

54 降そめて後いかはかり大ひえや

よ川の杉の雪のした葉は

庭雪厭人

55 ふまはおしと音信たえてこゝろある

人にくからぬ庭の雪かな

海辺松雪

56 うら風に雪ふきませて松たてる

洲さきの波の色そわかれぬ

水郷寒蘆

57 霜さむみ枯ふす陰をみしま江や

みしにもあらぬ波のむらあし

湖上千鳥

58 あま小舟いさり火くれて友さそふ

かたゝの浦に千とり鳴なり

寒夜水鳥

59 こほる夜は波にうき寝のをし鴨の

心しられて袖そさえ行

歳暮澗水

60 なかれてはかへらぬ物かゆく年と

谷の水としよとむ瀬もなし

初尋縁恋

61 つま琴の音にうかれつゝけふはまつ

雪のこすのとたつねてそよる

聞声忍恋

62 物こしのにたる声さへそれかとも

いはておもひをつゝむくるしき

忍親昵恋

63 ともすれは心ゆるしてむつまじき

人に涙のもれんとやする

祈不会恋

64 うきなからしめて祈るもつれなしと

おもはむ神のこゝろはつかし

旅宿逢恋

65 なへて世はかりのやとりと契りても

一夜の草のまくらかなしき

兼厭暁恋

66 こよひしもいかにねてまし鳥の音に

はかられむ身のわかれなりせば

帰無書恋

67 さ夜ころもたち別きて袖ぬらす

露の玉つさみぬ程そうき

遇不逢恋

68 いまはたゝ命なかさそうらみなる

はては物うきむかしかたりに

契経年恋

69 手を折てかそふる中にかさなれる

年はわか世のちきりならずや

疑真偽恋

70 いつはりのあるてふ人に我まこと

こゝろかへするおりをこそまで

返事増恋

71 書やりしそのことの葉は茂りそひて

へいかにせん袖にも心なくさまで
おなしつらさの文のかへしは

かへすにつらき水くきの跡

被厭賤恋

72 人こゝろおもへはつらしいとはる、

身は山かつといひもけたれて

途中契恋

73 忘れるなよわすれし^{はせしな}とも道への

露のちきりのかことはかりも

従門帰恋

74 立うかれ思ふしるしもすきの門の

あけぬにかへる哀をもしれ

忘住所恋

75 めくりあはむしるへともかな難波津の

里に事とふ小車の道

依恋祈身

76 はかなくもあらは逢世のたのみとて

身はいかさまにいのりてをみん

隔遠路恋

77 わかおもひしほるなみたの海山を

中にへたつる夕くれはうし

借人名恋

78 あちきなく名をかるかやの下葉まで

みたる、色や身にならふらむ

絶不知恋

79 おほかたの程こそあらめたかとかも

しられすしらて世をつくせとや

互恨絶恋

80 絶にけりあはれ二見のうらみつ、

ひろふかひなき心くらへも

暁更寝覚

81 ちかゝらぬ老のまくらにいつかさて

なれんねさめのあかつきの空

薄暮松風

82 夕々みやこのうちも深山辺と

うたかはれぬる軒のまつ風

雨中緑竹

83 雨つたふ竹のすゑ葉は雪にみし

色よりおもき露やをくらむ

浪洗石苔

84 むすまゝに苔のころもやあらふらむ

奥の岩こす波のたひ

高山待月

85 なか空の雲まにたかき山もあれや

月代みえて重き夜比は

山中瀧水

86 もろこしの山より落ちて布さらす

瀧のしら波月やすむらし

河水流清

87 底はみなもくつなかれて三輪川の
にこりたになき水の色かな

春秋野遊

88 春にきてかたの、さくらかさししも
もみちの秋にうつる程なさ

関路行客

89 富士の根も関路にちかしゆく人の
たうけをこゆるあしからの山

山家夕嵐

90 柴の戸をた、くゆふへのあらしをも
世のありさまと聞はすてめや

山家人稀

91 薪とるこの山人のこゑたにも
きくにまれなる谷のした庵

海路眺望

92 あかすみむ塩干しほみちうら風の
しつまるおきの舟のゆき、は

月鞆中友

93 物おもふ月とはたれかなかめけむ
たひ寝友なふ影もこそあれ

旅宿夜雨

94 あすは又いてん方なき夜の雨に

旅のやとりのいふせさそしる

海辺眺雲

95 波間よりしらむとみえて海こしの
山かつらもやあけんとすらん

寄夢無常

96 うつ、にはなきをかそへてさぬる夜の
夢てふ物そ人の世中

寄草述懐

97 もしほ草かく跡いかてあはれとも
いふへき人はわかのうら波

寄木述懐

98 余所にのみみてはつらなる枝ながら
しけらぬ木々のかた下さひしき

逐日懷旧

99 身のむかしこれそ、れとはしらなくに
過る月日を忍ふわりなさ

社頭祝君

100 おさまれる時とはしるしわか君の
世をわたり会のみやつくりせり

此百首者従上巳始而六月十四日遂其功

畢然者依好便此一巻令清書中院入道

合點之儀所望之処及再吟後悔之事数多

在之間式部卿。江先御談合申御不審之所々
令改作重而中院入道遣之候也

慶長十四年八月廿六日

(かわさき・さちこ 本学教授)